国立「国高旋風」

都立初の甲子園出場を果たした伝統校 “国高旋風”で二度目の聖地を目指す

都立屈指の進学校でありながら1980年夏、都立校初の甲子園出場を果たした国立。選手たちは「国高（くにこう）旋風」をテーマに掲げ、就任2年目の堀田一弘監督と密にコミュニケーションを取りながら各々の課題と向き合い、二度目の甲子園出場を目指してレベルアップに励んでいる。

■春のシーソーゲームを糧に再始動

今春は一次予選で葛飾野に3対2で競り勝ち、本大会に進出。1回戦は2投手の継投で篠崎に4対0で完封勝利。立志舎と対戦した2回戦は5対5で迎えた9回に2点を勝ち越したが、その裏に3点を奪われて7対8でサヨナラ負けを喫した。「競った展開で最後の最後に体力的にも精神的にも弱さが出た。緊迫した場面や勝負どころの心境や雰囲気を公式戦で経験できたことはチームの大きな糧になる」と堀田監督。國分結太主将（3年＝外野手）は「夏の大会に向けて苦しい場面でも自分たちの最大限の力が発揮できる精神力が必要だと感じた」と振り返る。惜しくも屈したが公式戦での緊迫したシーソーゲームから多くのことを学んだ。

■持続可能な国高野球部を目指して

昨春からチームの指揮を執る堀田監督は「選手たちも自分も遠慮なく意見が言い合える間柄になってきた」と話す。堀田監督は赴任前から国立に伝統的に根付く選手たち主導の練習を尊重し、選手と話し合いながら課題に応じた練習法やドリル、考え方などを提案している。また、「国立の選手たちは考える力と考えたことを体現する力が備わっている。練習環境を整えれば選手たちは大きく成長できる」と感じ、メンタルトレーニングやバッティング、ピッチングなどの専門外部コーチの招聘やグラウンド周辺の美化、トレーニング器具の導入など練習環境の整備にも力を入れている。「伝統や文化の基盤ができれば、監督や選手が変わっても取り組みは次の世代につながっていく。持続可能な国高野球部をつくるのが使命だと思って取り組んでいます」と話している。

■国高旋風で44年ぶりの聖地・甲子園へ

国立は午後5時45分に生徒が完全下校となるため、放課後の練習は2時間程度。選手たちは時間を有効に使うため、朝や昼の時間を個人練習に充てるなどしてレベルアップを図っている。「限られた時間で効率よく、その日にできる最大限のことをして成長を目指しています」と國分主将。さらに、投球の回転数や変化量などが計測できる測定器「ラプソード」を用いて、選手たちはさまざまな能力を数値化。定期的な測定で自分の現在地や成長を可視化し、効率よく合理的に弱点や課題と向き合えるようにしている。

44年ぶりの甲子園を目指すチームは「国高旋風」をテーマに掲げる。國分主将は「甲子園に出場して支えてくださった方々への恩返しをしたい。さらに多くの人たちに勇気と希望を与え、挑戦することの大切さを伝えたい。西東京で一番長く野球ができるチームを目指します」と意気込む。国高旋風を巻き起こし、再び聖地・甲子園へ―。国立ナインは西東京の頂点を目指して突き進む。

国立高校

【住所】東京都国立市東4−25−1
【創立】1940年　【甲子園歴】夏1回
1940年に府立第十九中学校として創立。充実した学習支援に加え、学校行事や部活動が盛んで、政官財に多くの人材を輩出する都立屈指の進学校。野球部は1980年に都立校初の甲子園出場。校訓は「清く、正しく、朗らかに」。

エース

小谷政也
（3年＝投手）

130キロを超える回転数の多い直球が武器のサウスポー。スライダーやチェンジアップを駆使して試合をつくり、国立の投手陣を引っ張る。

打撃陣

吉田閃
（3年＝捕手）

勝負強い打撃と長打力が持ち味の国立の4番打者。「家に帰ってからウエイトトレーニングをしている日もあります」と時間を有効に活用。捕手としても投手陣を支え、攻守の要としてチームを勝利に導く

酒井慧悟
（3年＝二塁手）

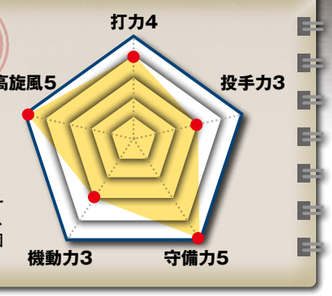
5番に座り、力強いスイングで外野の間を抜ける長打を放つ中距離ヒッター。得意のフィールディングでもチームを盛り立て、攻守でチームを支える

主将のチーム分析

國分結太 主将
（3年＝外野手）

国高旋風で甲子園を目指す

「国高旋風というテーマには『甲子園出場』という目標や『支えてくれる方々への恩返し、多くの人たちに勇気と希望を与える、挑戦の大切さを伝える』という目的が込められています。甲子園に出場して西東京で一番長い夏を目指します」



国立・堀田一弘監督

持続可能な取り組みの基盤を

「国立には伝統的に選手たちが主体的に取り組む文化があり、選手たちは考える力と考えたことを体現する力が備わっている。自分の大きな役割は各選手に寄り添った練習法や考え方の提案と練習環境を整えること。監督や選手が変わっても引き継がれていく持続可能な取り組みの基盤をつくりたいと思っています」

1977年東京都生まれ。拓大一―日体大。高校時代に選抜大会出場を経験し、大学卒業後に教員に。監督として2011年に府中東を秋ベスト8、2021年に小平南を夏ベスト16に導く。2023年から国立で監督を務める。